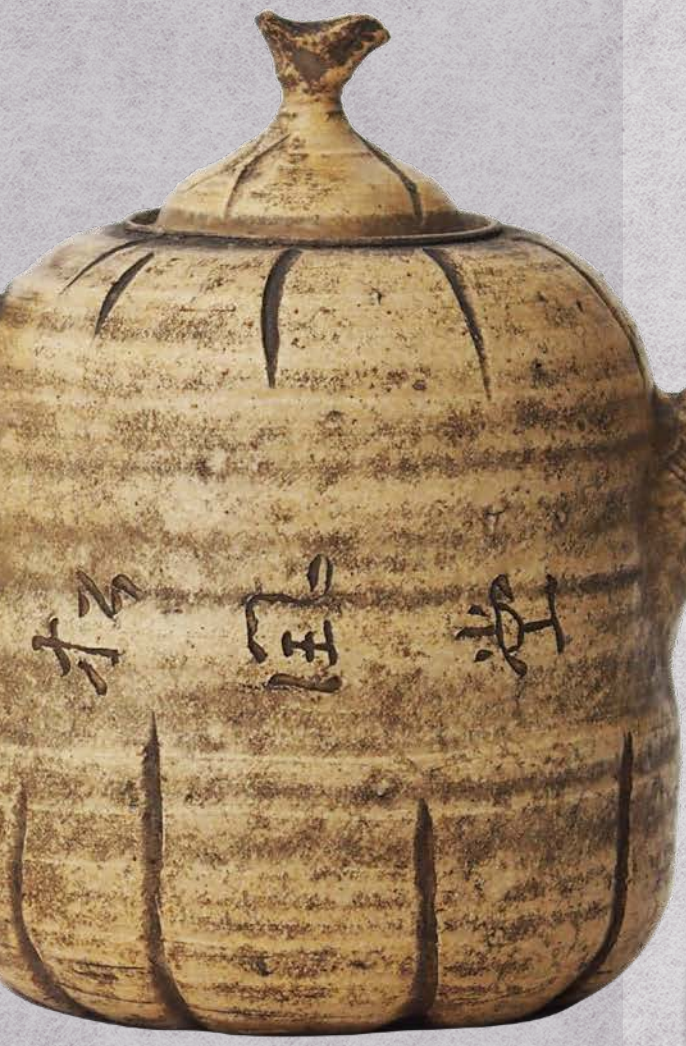
とこなめ陶の森　資料館
企画展

「足利家茶瓶四十三品図録」に挑む

常滑の名工二百年の旅



常滑の急須生産のルーツの一つに、江戸時代に描かれた「足利家茶瓶四十三品図録」があります。そこには43種類の急須のスケッチが収録されており、急須づくりの参考にされてきました。

本企画展では、図録にみられる急須の復元43点を展示するとともに常滑の急須のはじまりをひもときます。

2022年
1月15日(土)
－3月6日(日)

トークイベント
小西洋平氏と語る急須の魅力
1月15日（土）　13:30～15:00
講師：小西洋平氏（市無形文化財保持者）
　　大岩泰彦氏（寿門常滑金士恒研究会会長）
会場：資料館 2階 講座室　参加費：無料
定員：40名（予約不要）

講演会
「足利家茶瓶四十三品図録」をひもとく
1月22日（土）　13:30～15:00
講師：小栗康寛（とこなめ陶の森　学芸員）
会場：資料館 2階 講座室　参加費：無料
定員：40名（予約不要）

常滑の急須生産の始まりと『足利家茶瓶四十三品図録』

お茶を淹れる道具「急須」は、常滑焼を代表するやきものの一つで、日本人にとって最も馴染みのある茶器です。常滑で急須生産がはじまったのは、今から二〇〇年前のことと伝えられています。

そのルーツを紐解く史料に、「足利家御同朋巽阿弥秘蔵茶器三百五拾一品之内茶瓶四拾三品」（以下『足利家茶瓶四十三品図録』）と題する写本があります。この写本は、文政年間（一八〇八～一八二九）に、稲葉庄左衛門高道が遠州秋葉山へ参詣した際に、『足利家茶瓶四十三品図録』を譲り受け、その図に従って急須をつくり始めたのが、常滑における急須生産のはじまりとされています。

写本のタイトルからは、足利家の同朋衆の一人「巽阿弥」なる人物が集めた茶器ということが想像されます。この足利家とは、室町幕府の将軍家を指していると考えられます。同朋衆とは、室町幕府に仕える雑事や諸芸能にたずさわる僧侶のことで、将軍家が所蔵する財物の鑑定や管理などをおこなっていました。また、この写本とは別に『東山義政公愛器四十二品』と呼ばれる類似本も存在していることが明らかになってきました。このことから、『足利家茶瓶四十三品図録』は、足利義政（一四三六～一四九〇）が収集した唐物として知られる「東山御物」の一部を思わせるような内容ともいえます。しかし、今日の研究から、足利義政が活躍した15世紀後半に大陸から急須が伝わった可能性は低いため、何らかの意図をもってつくられた偽書きと考えられます。とはいうものの、これらの急須すべてが実在しない可能性も完全には否定できません。少なくとも、常滑や京都の名工たちがこの写本をもとにして急須をつくっていたことが知られていることから、江戸時代後期に誰かの手によって図録が作成されたことは間違いありません。

稲葉庄左衛門高道は、初代高道（一七七八～一八三九）あるいは、二代高道（一八〇一～一八六八）を指すと考えられます。大正時代に書かれた歴史書には、二代高道が図録を入手し、その後は急須の名工であった滝田椿渓（一八五三～一九三一）に貸し与えましたが三河で失ったとされています。二代高道は、天保14年（一八四三）に尾張藩第十二代藩主徳川斉荘（一八一〇～一八四五）が知多郡を巡覧した際、ロクロ技術を披露する程の腕前でした。これまでに二代高道がつくったとされる作品は少ないため、実態はわかりませんでしたが、近年になって急須の遺作が発見されました。この急須は『足利家茶瓶四十三品図録』に掲載されているものではありませんが、白泥土を使った手びねりの獅子摘み急須です。また、常滑で白泥土を使った作陶は、天保年間（一八三〇～一八四四）から始まったとされていることから、二代高道が活躍した時期につくられた急須と考えられます。

『足利家茶瓶四十三品図録』に掲載されている急須をつくった常滑の名工は、二代伊奈長三（一七八一～一八五七）、初代松下三光（一八〇六～一八六九）、初代杉江寿門（一八二六～一八九七）、四代伊奈長三（一八四一～一九二四）、二代杉江寿門（一八四六～一九二八）、松本重信（一八六四～一九五〇）が挙げられます。彼らの作例で最も古いものは、初代松下三光の作例です。天保8年（一八三七）に文人画家の椿椿山が残した日記には、初代三光に依頼した急須のことが記載されています。

初代杉江寿門は、『足利家茶瓶四十三品図録』に掲載されている急須をてがけた人物として知られており、20代後半から晩年に至るまで多数の遺作があります。また、初代寿門の作例で特筆されるのは、単に写しをつくるだけではなく、湯沸かしや水注、ときには横手から後手に改変を加えるなど図録を通じて新たな価値観を生み出した点にあります。

今回の展示では、市指定無形文化財保持者の小西洋平氏が『足利家茶瓶四十三品図録』の実態に迫るため、43作品すべての写しに挑戦しました。以下に作品の一部を紹介します。

「No.12 ショウケイトコウ」は、動物のような摘みが特徴で、幕末から明治に流行した獅子摘みのモデルになった可能性があります。「No.21 メイホヨウ」、「No.41 コチョウコツ」は本体に対して細長い把手が特徴です。このような把手は、現在のように把手を持って本体を持ち上げるのではなく、把手を摘み本体を傾けて使用した可能性が考えられます。「No.19 ウンキ」は直角にクランクする把手が特徴です。現代と同じような使用方法も可能ですが、把手の握り方や指でつまみひねるような動作も想定されます。

また、小西氏に作陶の感想をきいたところ、「二次元から三次元に具現化するには相当の技量が求められること、新たな着想や創作意欲をかきたてる急須の数々であり、先人たちが図録を拠り所とした意味を感じる」ということでした。

本企画展を通じて、新資料の発見や『足利家茶瓶四十三品図録』の謎を解くきっかけになれば幸いです。

（とこなめ陶の森　小栗康寛）

四代伊奈長三作
「ショウフウドウ」急須
（とこなめ陶の森 蔵）

01. エンアン

02. ジウン

03. ダクシ

04. ルコンズ

05. センワンシコツ

06. タイトウコツ

07. キッコ

08. ウンブタイ

09. リソシ

10. テンネンチ

11. アトオウ

12. ショウケイトコウ

13. オウスイシ

14. チョウロウメイ

15. センショウワン

16. キクムロウ

17. クタイ

18. ウタリンシ

19. ウンキ

20. セイフウイン

21. メイホヨウ

22. ホゲツシ

23. ケンロウシ

24. カクメイシ

25. ケンコントウ

26. ウンムクツ

27. コキコツ

28. リンシ

29. ロタイ

30. ホウコエン

小西洋平氏による足利家茶瓶四十三品写

31. アンゴコッシ

32. ショウフウドウ

33. ミンハイコツ

34. ショウシコツ

35. ホウカンシ

36. レンカンコッシ

37. ガクオウシ

38. コウセンコツ

39. ウンナン

40. ホコシ

41. コチョウコツ

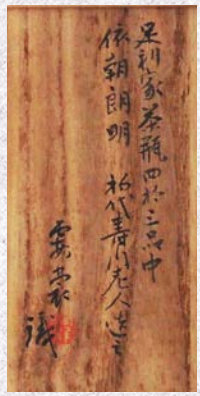
42. イッチョウコツ

43. ウンジョウシ

初代杉江寿門作
「カクメイシ」急須（とこなめ陶の森 蔵）

初代杉江寿門作
「オウスイシ」急須（個人蔵）

初代杉江寿門作
「エンアン」急須（個人蔵）



初代杉江寿門作
「チョウロウメイ」急須一双（個人蔵）

二代伊奈長三作
「レンカンコッシ」急須（個人蔵）

初代杉江寿門作
「ショウフウドウ」水注（とこなめ陶の森 蔵）

初代杉江寿門作
「ルコンズ」湯沸かし（とこなめ陶の森 蔵）

（展示協力…大岩泰彦・小西洋平・中村眞二・西尾博久・八木明子）